

日本海側に、大量の雪を降らせた今年の冬も、このお彼岸を境に春にバトンタッチをします。

沢山の花が、その色と香りを競い合つて、春は一斉に幕をあけます。

長かった冬を越して、伸び伸びと芽吹く草木の輝やき、そこはかと膚のぬくもりにも似た、おだやかな陽ざしに、心がフツとほほえむような昨今です。

檀信徒の皆様には。お元気にて新しい年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

新聞を拡げると、毎日のように身の毛のよだつ恐ろしい事件、考えるだけで心が凍りつくような悲痛な事件、あさましいニュースが目に映ります。

そして、身近な世界をみても、物が豊富になり、暮らしむきは恵まれたものになったというのに、私達の精神生活はどこか貧しさやさびしさへ向かつて歩み出しているように思うのは、私だけでしょうか。

「現代の子供気質」と題して、先般、私立中学校の生徒の作文を紹介した本を目にしました。

ぼくのお母さんというテーマです。

「ぼくのお母さんは、夜おそくまで起きていて、ぼくを見守っていてくれます。ぼくは一生懸命勉強をして、よい学校へ入りたいと思います。そして卒業したら、よい会社に入り、お金を貯めて、お母さんが年をとったら、よい老人ホームに入れてやり、楽をさせてあげたいと思います。」といった内容のもので、びつくりしてしまいました。親子のかかわりについて、この文に異和感をもったのは、私だけでしょうか。

現実にはそうせざるをえない状況は、いくらでもあることは十分知っているものの、子供の時から、親子のかかわりを、こういう形でしかとらえられないことを寂しく思います。

家族形態の中でも、最もくずれにくい「とりで」でもあるべき親子の関係で、孝養（この言葉自体、死語に近いと思います）という事柄ひとつをとつても、先刻の作文のように、少しゆがんだ形で子供達は、受け取めているという現実をみると、世間の常識という物差しが、少しずつ狂い始めているとしかいえないと思えてなりません。

では一体、美しく生きるということの判断は、どうして培うことが出来るのでしょうか。

最近の親は、子供に美しく生きるということを教えておらず、勉強最優先の生活では美しさを共感する心のゆとりもなかなか見出せないのかもしれない。

まず私共親が、自分自身を冷静に反省し、その行いの中から自分中心の片寄りをもたない見方で、全ての事物をみきわめなくてはならないのではないのでしょうか。

仏教は、正しく導く教え（真・善・美）であります。

手前みそと思われるかもしれませんが、てはじめに仏壇に向かう親の後姿を、大切にしてほしいと思います。御先祖さまから脈々と流れる縦のつながりは、今後も絶えることなく、生命のつながりとして、広がりをもつて続いていきます。

私共が、親を、祖父母を、そして御先祖を敬い、まつる、その心情が子や孫に伝わらぬはずはありません。

そうした信仰の姿を通してこそ、親への正しい孝養の道・美しく生きるということへの道が開けてくるものと思われてなりません。

一口伝導板

・我という 心の鬼が

募りなば

何とて 福は 内に入るべき

・さみしい時には 目をつむろう

まぶたの裏には

広い世界がある

悲しい時には 手を合わそう

胸の中には

光がある

・心豊かな人は 感謝で生き

心貧しい人は 不平で過ごす

お寺から

○大般若祈禱会 ― 報告 ―

今年より大般若祈禱会を

少しでも多くの方が御参加

出来るようにとの思いで、

成人の日に変更しました。

今年は一月十二日が成人の

日にあたりました。当日は

小春日和のおだやかな陽気で、多くの方達

に御参加いただけました。

家内安全、身体健全、厄災消除・・と、

人それぞれの祈願に対し、心をこめて沢山

のお坊さま方に御読経をいただきました。

ケンチン汁もふるまわれ、和気相々の一日

となりました。

○新旧役員さん交替

三月十四日、この一年、お世話になった

旧役員さんと、四月より一年間お世話にな

る新役員さんの顔合わせ会がありました。本年度は、秋に観賞会を予定しているザル菊の世話を、有志の方々に率先して推進していただくという、新たなお役もふえましたが、ご無理のない所で、手をたずさえ合つて、住職のめざすところの、誰もが喜んで足を運べる寺院運営に御力添えをお願いしたいと思つています。

旧役員さん ありがとうございます。

新役員さん よろしくお願い致します。

○墓地を分譲しています。―御紹介下さい―
境内の中にある永代観音墓はお参りしやすいスペースで、いつ誰が訪れても気持ちよく仏さまと対峙できる環境にあります。が、道路を隔てた墓地の方は、土が山積みとなつており、区画整備、通路の整備等、長い間手がつけられておらず、不備な点も多かったのですが、土を撤去することを皮きり

に、徐々に整備を進めています。

分家の皆様、又知人、友人にお墓を求めておられる方がいらつしやいましたら、是非総世寺の墓地を御紹介下さい。

沢山の人々に集つてもらい、自分達のお寺を誉りに思つてもらえるよう、寺作りをしてまいりたいと思つていきます。

○二月十五日―涅槃会（お別れの日）

お釈迦さまは二月十五日にお亡くなりになりました。お釈迦さまの場合、亡くなつたことを「涅槃に入る」といい、この日を涅槃会えというのです。

お釈迦さまは、三十五歳で仏陀となられてから八十歳で涅槃に入るまでの間、多くの地域で人々に教えを説いてまわられてした。その最後の地となつたのは、クシナガラという所でした。

いよいよ自分の最期が近いことをお察し

になられたお釈迦さまは、沙羅双樹の木のもとに体を横たえ「私の亡きあとは、自らを大切にし、これまで私が説いた教えをよりどころとして、いつも心を正しく保ち生活するよう」と、最後の説法をされ涅槃に入りました。命あるものは、いつかは滅するという真理をお示しになったのです。

涅槃会には、お釈迦さまの最期の様子を描いた涅槃図をかけて、そのご遺徳を偲びます。涅槃図には、弟子達だけではなく、多くの動物や昆虫までもが集まって来て、お釈迦さまの死を嘆き悲しんだ姿が伝えられています。

当寺でも二月一日～二月十五日まで、涅槃図を本堂に掛けます。小田原城主の大久保忠世氏が模写したものといわれ、総世寺の寺宝となっています。

○四月八日 花まつり（降誕会）

お釈迦さまは、今から約二五〇〇年前の四月八日に、インドの北、現在のネパールにあるルンビニーの花園でお生まれになりました。お釈迦さまの誕生日のお祝いを、「花まつり」というのはこのためです。

この日は、美しい花が咲き乱れる花園に見立てた花御堂に誕生仏をおまつりし、甘茶をかけてお祝いします。

甘茶をかけるのは、うぶ湯の代わりに、天が甘い雨を降らせて誕生をお祝いたしたという言い伝えによります。

この「花まつり」とは、何と優しく希望

に満ちた響きを持った言葉でしょう。長く
厳しい寒さの続いた冬が去って、暖かい太
陽の日差しに草も木も美しい花を咲かせ、
人も自然も生き生きと活動する春の訪れ。
お釈迦さまがこの世にお生まれになったこ
とが、私達の生活に一筋の希望をもたらす
明るい春の日ざしのように感じます。

総世寺でも花御堂を作って、誕生仏に甘
茶をかけていただけられるよう用意をしてあり
ます。この佳き日に、お寺へ足を運ばれま
すよう、おすすすめ致します。

